ブリスコウの画布

堀田　達思

それはセンセーショナルな動画だった。

車と車が衝突する、人が刺される、飛行機が落ちる、津波が畑を飲み込む。どれもあまりにも平然と、静かに、当然のことのように、遂行されていく。あいつらは、どうしてこんな地味なものに興奮できるのか、不思議に思う。よほど退屈しているのだろう。信じられないことだが。

木下にはもう飽きた、と言う。これも信じられない。うちのなんか、最初は抵抗したけど、すぐに撮影にも応じてくれた。

どうしてそんなことをいま思い出すのだろうか。しぬんだろうか。そうかもしれない。もうダッシュをかけてしまった。悪漢めがけてまっしぐらの真っ最

中だ。もう見てすぐわかった。あいつ、人を刺そうとしている。通り魔だ。すごいやばい感じだ。

現実は、わかりやすい。そこで何が起きているのか目をこらす必要もないし、言われなくても、それが何なのか、すぐにわかる。ダイレクトにわかる、それが現実というものだ。

こんなにやばい感じなのに、これがもし動画だったら、音もなく人が、ただすれちがうだけみたいにして寄っていて、離れていって、刺されたほうは、家に帰ってよっこいしょとか言ってくつろぎモードになるときと大差ないような感じで膝を折るんだろう。けど、目の前のこいつはもう、そんなもんじゃない。

おれの右腕には力が満ちている。おれはダッシュする。交差点の向こうで、もう刺す瞬間だった。おれのダッシュは間に合った。

ぼこってばきってやった。しんだみたいだった。

ちょっとすごいと思ったから、撮ろうと思った。おれはそのへんろくでなしなのだ。ほんとうのリアルというものをあいつらに知らせてやろうと思った。指がすべった。インカメラだ。だれだこいつ。

人がいる。なにかしている。それは灰色だ。灰色っていうのは、道がアスファルトだから、なんかもう、ぜんぜん新しくないやつだから、灰色。で、横断歩道も、灰色。白っていうのかもしれないけど、もう灰色なんだよ。それだけなんだけど。それだけじゃなくて、それはたとえば、事故の動画とかさ、見るじゃない。

パンチ打ったら、ぼこーってなるような、そういうものだと思うのよ。やっ

ぱ、そう思えてならない。でもちがう。

小学校の教室。隣のクラスの、なんといったっけ、よく見かけるやつが、いきなり入ってくる。なぐなわらすご。言葉の調子で、なにかのまねだとすぐにわかる。国語の教科書のまねだ。

なぐなわらすご、とまた言う。どっと笑いが起きる。隣のクラスでもやはり、同じところを読むのだな。同じ造りの、ちがう教室。ここでやっている授業が、向こうでもやっている。その教室のにおいがそいつにもついている。言葉にも、同じにおいがついている。

中学校では出席番号で生徒をあてる。番号で生徒を呼ぶとか、最近はそういうことしないのかもしれないけど、おれの頃はそうだった。カードに番号が書いてあって、先生のお手製なんだけど、それをトランプみたいにして切って、めくる。番号を読み上げて、その番号の生徒が質問に答える。で、その番号、つぎに呼ばれるのがなんとなくわかる。場の雰囲気ていうのかな、なんとなく、つぎにこの番号が呼ばれたら、いまのこの教室の空気感にマッチするな、とわかる。その番号が発せられたときの、その音の持つ形、その音が場を占める、その占めかたが、どんなのがきたらぴったりくるかな、と考えてみると思い浮かんでくるものがある。

そういう、形。ひろい意味での。ものはみな形を持っている、とか、そういう。いっさいがっさい捨てて、形というレベルだけで見たときに、ありそうに思える形。それはどんなか、と考える。それを現実とすりあわせたとき、どういうものとして具現化するかを追っていく。そうすると、たとえば、ここの座

席が空くとぴったりくるよな、なんてことがわかる。次の駅でほんとうにその座席が空く。

それが世界のほんとうだ。いたるところに意味がある。むきだしになっている。ごろごろしている。吸い取るとか、絞りとるとか、そんなことする必要がない。あふれ出ている。すべてがそれ専用で、使い回しのところなんてない。

でも、隣のクラスのあいつは、そうじゃない。冒険的だ。大場、たしかそんな名だったような。色が黒くて、背が高くて、大人びていて、ぎろっとにらまれると、なにか差を感じる。力もつよく、足も速く、おちついた感じでじっとしていることも多い。

大場についていたにおいは、必ずしも、教室のそれだけではない。ちがうにおいがした。なんかちがうな、と思うにおいだった。冒険家のにおい？そうかもしれない。みんな笑っていた。おもしろかったからだろう。

国語の教科書の一節をまねすると、笑いが起きる。

そこのところがちょうどおもしろいところだったら、そこだけ読んで、それがおもしろかったことを思い出して笑う、かもしれない。

じっさいそうだったのかもしれない。大場はそれがおもしろくて、だから、そこのところを抜き出して、言った。そうしたら、みんなもそうだった。まあ、それだけのことかもしれないよ。でも、そういうことにはしたくない。本音出ちゃった。

自分向けに書かれたのではないものを読む。あるいは、読者のために書かれたものではないものを読む。文字の中に秘められているものがある。そりゃそ

うだよ。もう、文字にしちゃうと、ぜんぶ一緒じゃん。基本、みんな同じ文字を使って書くわけで。だから、秘められざるをえない。

なんでもないただの五文字か六文字か、いやもうちょっと?それだけをなんのひねりもなくただ口にする。そして笑う。ほんのいくつかの、並んだ文字を一枚一枚はがして、声に貼り付けなおす。そして笑う。ほがらかだ。掛け値なしに、悪くない、意味もない。踏み固められた地面のような、固くて、ぱさぱさに乾いていて、みんながそこを通る。平たくなっていて、そこに道路があるなんて、そこが道路になっていることなんて知っている人はほとんどいないんじゃないか、というくらい、ほんと、道路。だれでも平気で使うもの。ひらたくて、厚みも奥行もなにもない。あっても誰も顧みない。乾いた文字。だれもが無造作に使って、ほとんど顧みることのない文字。それを並べる。それはもう、道路を敷くのだってちょっとやそっとのことじゃないし、どんな何であれ、きちんと並べるっていうのは、ちょっとやそっとのことではない。でも、並び終わって、決まってしまうと、とたんに気安い。湯気が立っていて、変なにおいがして、立入禁止になっていて、大きな機械が大きな音をたてていて、人が何日間も続けて、一日中かかりきりになっている。でもいったん出来上がると、そこにそんなものがあるなんて誰も知らないみたいだ。きほん、道路で埋め尽くされているからね。そりゃどこかたいへんなところに初めて通った道路だったら、ありがたい、ありがたい、て言って、いつも道路のことを考えて、道路に乗るかもしれないが、ここはもうそういう場所ではない。いつのまにかに並び終わってそこにあるものを、ぺろっとはがして持ってきて、それをその、人

があれだけ頑張ってやったものをだな、何も知らないくせに、いや、そうではなくて。

かげひなたやわらかし夏の終わり。交差点に差す陽の光がすっかり往時の勢いを失なっているのを詠んだ句だ。ほぼ真四角の、とても小さな交差点で、小学校とコンビニとマンションの前庭と一軒家に囲まれている。金色とオレンジ色の中間のような色の陽差しが交差点にあふれている。あふれている、なんていうと、情緒的すぎるかもしれないけど、たぶん、誰が見てもあれは陽差しがそこに注がれて、それがあふれている、と思うだろうよ。あったかそうだ。夏はもう終わりなんだけど、だからって寒くなったわけじゃないからね。

横断歩道はとても短い。交差している道路は二本とも、車なんてほとんど通らない。でも、待つ。信号が変わるまで、誰もいない、車も通らない、静かな、陽差しだけが降り注ぐ交差点で、信号機の色が変わるのを待つ。機械のランプの色が変わるのを黙って待っているのは、まあ、その通りです、としか言いようがない。地面があたたかそうだ。

なんであれ、なぜかみんなそうする、かならずそうしてしまう。それのほかにやり方が存在しない。そういう過程がかならずある。低レベルのところでメカニズムを共有していて、それをコントロールすることができない。額を押えられたらイスから立てない、とか。まあこれは、いつもとちょっとちがうやり方をすれば簡単に立つことができるのだが。

人が落ちた（あるいは、刺された、と言うべきかもしれない）。そして、ぜんぶが区別なしに渡される。ぜんぶといってもほんとうにぜんぶかどうかはわか

らないが、目で見たときよりはずっとぜんぶだ。少なくとも、そこになにがあるか、止まった時間の中でじっくりと点検することができるくらいにはぜんぶだ。そこでおまえらの出番だ。ほんとうに感心する。視覚データのイミテーションに対する情熱ときたら、いや、この世界では、それは情熱とは考えられていないのだった。

灰色の、もわもわとしたカビを詰め込んだだけなような不鮮明なものですら、無駄なディテールに満ちている。関係のないものが映りすぎている。というよりも、関係のないものをかきあつめて、そのはしっこどうしをつなぎあわせて、やっとのこと、お目当ての事件に紙を貼り合わせて像をつくることができるようになる。人が落ちれば（あるいは、刺されれば）、ただではすまない。しかしだからといって何か特別なことが起きるわけではない。みなよせあつめだ。

インカメラに映ったこいつ。こいつは誰なんだ？まあ、ひどいもんだよ。じつに汚ない。でこぼこした肌に、ぼんやりとした目つき。とても力のあるやつには見えない。正直に言うと、さいしょはこう思ったよ、これがその、あれなんだろう、そしてほんとうにあれなのはあっちのあれのほうなんだろう、と。そういう落ちか、と。たしかにそうかもしれない。こいつは、つねにいたるところに破れ目を抱えていて、気を抜こうが抜くまいが、ぼろぼろと自分自身をこぼしてこぼしてこぼし続けて、あっというまにあとかたもなくなる。どこにいるのかすぐわからなくなる。寄る辺がなさすぎて、ときにはうそと見分けがつかないかもしれない。

空間の未来、こうなっていそうの世界。形をもたないもののための形。それ

はひとつのあれだね、ときちんと並べて収納することのできるものかもしれない。もうどこかで答えの出ているものかもしれない。それならそれでいい。いいようにしてくれていい。どんどん回収していってくれ。むしろたすかる。おれはおれでかっこうよく見えるよう気をつかってゴミをばらまいてやったつもりなんだが、まあ、そんなことは関係ないんだろう。

記録。そこに何が映っているかを探し出すことばっかりの連中がいる。そしてなにをみつけたかで自慢のしあい。同好の士の集いだよ。

どっちかひとつしか勝ち残れないとしたら、負けるのはおれのほうだろう。最近はさすがに観念しはじめている。

橋と高速道路と電車の高架が入り組んで出来た何角形だかの隙間に川、土手、家の屋根がひしめきあっている。それらはそれぞれほんのちょこっとずつしか見えないけれど、だからといってディテールが省略されることもない。この集積感がまんべんなく、どこまでも広がっている。冒険のしがいもあろうというものだ。

そこにある、というただそれだけのことで、もれなく記録されてしまう。つねに全部入りだ。ご苦労なことに、いや、ほんと、そう思う。ご苦労なことに、おまえらときたら、ほんと、いろいろ吸い出す。ほんと、灰色。そういう印象。おれにはそういうのって砂漠みたいに見えるんだけど、そうでもないらしい。そういう見方はむしろ、鈍くて、不活発であるらしい。

道路、なにかで敷き詰めた固い地面。なんどでも見つけなおすことのできるもの。

なんどでも見つけなおすことができる。ほんとかな。なにかうかがいしれない強靭さを感じる。まあ、大場というのは、そういう感じのする奴だった。

なんどでも同じものを見つけなおすこと。使いまわすこと。あれとこれとは同じものである、その隣にはこれがある、として版図を広げていくこと。大場は、きっと、何度でも見つけることができる。冒険とは、とどまることではないだろうか。

地味でもなんでも、かすかすでもなんでも、あるったらある。とある文字の並びがそこにある。だからそれを何度も読める。あるいは何度でもそれを読むことができることが、それがそこにあることの動かぬ証拠となる。丹念なものだと思うよ、ほんとうに。平等だ。平等であること、あるものぜんぶを踏査すること、これが冒険でなくてなんだろう。そして、使いまわせるものはみな使いまわす。うかがいしれない強靭さに支えられた営みだ。

どうも話が単純になってきた。悪漢を叩きのめしてやったところだった。もう、吸い取るとか、絞りとるとか、そんなことする必要がない。ここでは、あふれ出ている。たとえばね、そう、電車の座席。じわじわと浮き上がってくる。学校で、番号で生徒を呼ぶとか、最近はそういうことしないのかもしれないけど、おれの頃はそうだった。

深い深い森の奥へとわけいっていく。森？森なんてあったっけ？しかし森というからには森なのだろう。ようは、暗く、狭く、歩きにくく、湿っていて、そこかしこでざわざわとつねに何かが動いていて、身動きすればどこかしらが何かしらとこすれあって、それらをかきわけることなしには一歩とも進むこと

ができず、進むごとに光が遠のき、迷いやすく、振り返ったところでいまきたばかりのところすら見出しえない。進む？前に、進む？方向なんてないよ。カニ歩きや後ろ歩きよりも前歩きのほうが得意だからね、みんな。だから、みんなそうする。歩いてしまう。さすがに寝っ転がるのはむずかしいだろうけど、何も、歩かなくてはならないことはない。じっとしていたっていいし、しゃがんでいてもいい。でも、たいていは歩く。じっとしていられない。相当に弱ってしまうまでは、なかなかしゃがみこまない。ようは森だ。入り口はどこにでもある。出口もいたるところにある。中に入れば必ず迷う。だがそれは閉じ込められることを意味しない。さて、この深く暗い森の中へと足を踏み入れたいまとなっては、進むも戻るもなく、ひたすら進むばかり、戻るばかり、どちらでもいい。街中であれほどに猛威をふるった移動という観念は、森が、その力のほとんどすべてを奪い去る。森へ深くわけいったとき、それは多くの距離を移動したことを含意しない。光が差している。やわらかい光だ。かさかさと葉を踏む音がして、あたたかそうで、そこは、そこにたどりついたと思う。森の奥では、必ず行き合う場所がある。そこに差し掛かると、そこにたどりついたと思う。葉の積もった、あたたかい色の地面を踏んだとき、葉の割れる音を聞いたとき、それとわかる出来事に出会う。うえからふってくる。満ちる。満ちるところを見てしまう。記録はそこで途切れている。なんつって。ようは、迷った。あるいは迷わずたどりついた。

道路が交差する角度。この場所、この時、この角度、いったん失なったら、同じところに戻って同じようにしたつもりでも、あとかたもなくなっている。

まあ、録画はできそうにない。

交差点の向こうに誰かいるな、と思ったら木下だった。かすんでいてよく見えないが、まちがいない。交差点の向こうに木下が立っている。へんだ。へんか？いま木下のいるところが、さっきいたところで、そこからダッシュをかけたのだから、これであってるのか。交差点のどの角にいたかが意味をもつとか、一丁前なもんだ。

ただ、交差点の向こうに人影が見えたにすぎない。それだけのことで、それでどうなったか、知らんぷりができたら、それはすばらしいことだと思う。知らんぷりしたい。だがどうやら木下らしい。まったくもう、これだからもう。信号の向こう、交差点の対角線上、木下が立っている。らしい。いや、らしくない。ほんものの木下だ。すぐそばなのにすぐにはわからなかった。暮れかけているのかな。信号が赤い。あいつからは見えない信号が赤い。ぼんやりとした人影が交差点の向こうに立っている。交差点の向こうに立つと、木下はこんなふうに見えるのか。いつか見せてやりたい。両手をポケットにつっこんでいる。ときたまおれのほうに目線を飛ばす。なぐなわらすご。信号はまだ変わらない。おれは振り返って、あいつから見える信号を見上げる。これっぽっちの横断歩道、青になりさえすればあっというまだ。おれのダッシュをなめんな。必ず間に合う。待ってろ、木下。なぐな、わらすご。

おれはろくでなしだから、こんなにすぐ近くなのに、はっきりとわからない。暮れかけているのかな。森のどこを歩いても同じに見える。街中の毒が芯までまわっていると言わざるをえない。が、まあ、目をつぶってくれ。おれは、そ

ういうほうなんだ。

森へ深くわけいったとき、かならずたどりつく場所がある。おれは、いつまでも、どこにいても、おれというひとつの油の輪であり、早い者勝ちの存在である。最初におれと言ったやつがおれなのだ。そんなふうにしておれたちは生きていきたい。インカメラに映ったやつがいる。そこにいるそいつがおれの知らないうちにおれになっていたら、最高だ。

〈了〉

(1996)